



坂村へぬけるのであるが、その道のべに当るところである。堅田の六地藏中、形の整った唯一のもので、高さ二メートル、均斉美に富んだ習作である。

左に四示するようには、上から宝珠、笠、装飾と垂木を彫る。龕部は四角で、四面にそれぞれ間隠二体と地藏六体を刻する。幢身は下ふくれとなる四角柱で、安定感がある。各面の中央には種子を彫り、正面は種子の下に銘文がある。台は三重の形が重みを見せている。

種子は金剛界の四仏を彫る。前出西野の地藏塔と同じである。

(銘文)

銘奉園園地藏園修宣(金福)

善根功德主

賢山道鉄上堅(鉄)

白線妙玉比丘尼

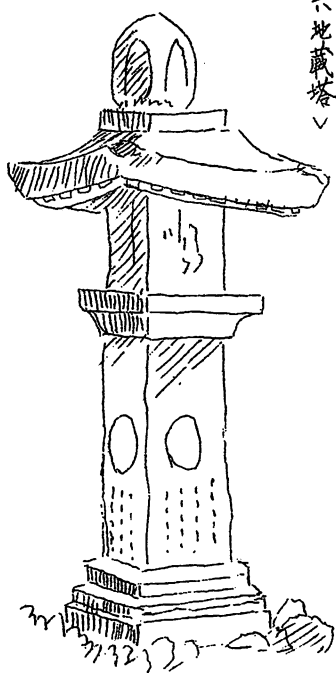
功德成林百年久植

善根之種解脱問道

三身共奉賞花苞矣

圖 天文十七年戊申十月廿四日敬白

△下府坂の  
六地藏塔△



解

銘 (石群や鐘などに彫りかけた文字)  
願修冥福 (死後の幸福を祈るため仏事を修する)

功德主 (仏陀、三宝に供養する施主)

空山道鉄上座 (道鉄という僧で、和尙の次が小僧の上座)

白線妙玉比丘尼 (妙玉という尼さん)

功德成林 (功德を積むことの多い樹木の林立するにたとえた)

百年久植 (久しい間善根功德を積む)

解脱 (煩惱のそとくをきといて、三界の業苦をぬけ出る)

問道 (人いふところによれば、いふなれば)

三身 (過去・現在・未来)

奉 (なす)

賞花苞 (草花が茂る花園の美しさを賞るであろう)

矣 (句の末尾に用いる助母、語勢を強めるために用いる)

天文十七年 (一五四八)

六地藏を建立して銘し奉る、冥福を祈って仏事を修する、善根の功德主は、空山道鉄上座と白線妙玉という尼さんである。功德を成林のように、善根の種を久しい間つむならぬ、過去・現在・未来とも、花園の中に居るような、極楽にある事を賞ゆるにまちがいない。

(七) 府坂沖の六地藏

府坂村の人家より西北、田圃の中らまんじゅう笠をかぶって立つ六地藏がある。

ここは旧堅田街道で、西野村よりせせらぎを渡り、竹藪をぬけると府坂村になる。庄屋屋敷の近く、鯉越えという府坂峠の古戦場を背景にして、戻つねんと立つ六地藏は、何かいやくおりに見ゆる。誰か供えるのか、お花がたえない。庶民の信仰は根強いものである。

高さ二メートル、宝珠はとんがり帽型、笠は図のようにな

んじゅう型、龕部は四角で、一面に三体づつの仏像を刻む。六体の地藏と二体の閻魔であるが、風化のため地藏の名は判明しない。中台には蓮花の線刻がある。



幢身に銘文があり、造立年月日、享保七年(一七三二)約二五〇年前の建立である。基礎は土砂に埋まれている。

(幢身)

右側面 皆享保六年五月□□  
 正面 奉造立 地藏菩薩  
 左側面 慶保中興 施主 村坂村定田□□

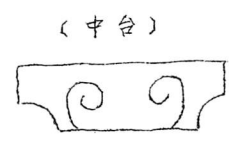
これは庵仏中興であるから、六地藏が既にあり、洪水か何かによってなくなり、其の後定田某によって造立されたものである。

(ハ) 棚野の六地藏

棚野村に行く旧道は、竹角村からつづいていた。川を渡って棚野村本家の沖き、川に添って酒屋の前を通り、さらに川を渡って市福新村に出る。この旧道に残る大木、おくの木の下の立つ地藏が棚野の六地藏である。最近このおくの木は、寄る年数には腐てず、大風に吹き折れ、昔の面影は見られませんが、かつては道行く旅人の、あるいは野ら仕事の休み場所として、涼をとらして

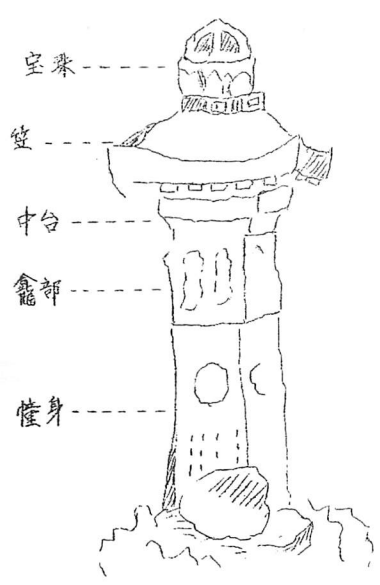
くれた藪かけに、こっそり立つ六地藏は思して語らないが、幾星霜を経て風雨にきずついた姿は、道行く人に棚野の歴史について、物語りたげに見えるのは、私のみではあるまい。高さ二、三メートル。

龕部は四角四面、一面に二体の仏像を刻む。中台は龕部の下にあるのが正しいのに、重ね方がちがって、上になつてゐる。幢身には、銘文と種子(しゅじ)を刻む。種子は地藏元の石幢(前号26ページ)と同じく、金剛界の四仏である。



(銘文)  
 欽奉造立六地藏頭修  
 (巨福善根主清倍男)  
 逆修主妙両信女壽位  
 現世安穩後生善處田  
 徳成林百年久植善  
 根之種解脫開道三  
 身共攀覺花芭突  
 于時天文十八年己酉三春五日敬白

(解)  
 欽奉造立(ツツシミテ造立し奉る)  
 願修願修  
 巨福巨福  
 逆修(生前あるかじめわが左下に仏事を修して冥福を祈る)



(棚野の北蔵塔)

龍部  
四面の仏体

前面  
(不明)  
法印地蔵

右側面  
(不明)  
鶏籠地蔵

背面  
陀羅尼地蔵  
金剛願地蔵

左側面  
閻魔大王  
閻魔大王

前記銘文によると、清信という男性が、若くして死んで妙爾信女のために、冥福を修して造立した六地蔵である。その他は下府坂の銘文を参考されたい。

それでは、なぜこの道のべに造立したのであるのか。経の終りに、回向文を唱えるがそれによると、

「願はくば此の功德を以て普く一切に及びし、我等と衆生と皆共に仏道に成ぜんことを。」

この願望からではあるまいか。(以上)

(前号の改正)

前号二七ページ、西野地蔵の元の六地蔵、纏身部四面のうち、  
此 アク阿弥陀如来は誤り、不定成就如来が正しいので  
訂正下さい。

おしらせ

### 菅一郎先生の思い出

去る十月九日から十三日までの五日間、菅先生の遺作展が、佐伯文化会館で行なわれ、先生を敬慕する多くの人々に、深い感動を与えた。幸甚にすばらしいものであった。

先生は文談会の賛助会員として久しく、お訪ねして佐伯の古いことを伺ったり、お手紙で書いて教えて下さったり、「龍川舟遊八首」(中島子玉)の陰養の筆者花井惟棟の墓を、現地に案内して下さいたり、次号にそれらをとりに上げて、先生をしのびたい。(羽柴)

随想

### 下浦旅日記 (一)

米水津湾で考えたこと  
主として浦代庄屋成松家と法華津氏との関係

在東京 会員 御手洗 一而

(米水津村出身)

数年來の計画を實行して、祖先の地である瀬戸内の島々を一通開巡遊し、続いて「下浦」といわれた米水津・入津・蒲江・名護屋と続く海岸を駆け足で廻り、やれやれと思つたにも心快い疲労も覚えた。そして一つ一つの資料を研究する糧として、メモ書きに記憶を整理することにした。

先ず考古学的に資料のない下浦地区は、神武東征、景行西征の伝説や、紀記・風土記による調査から歴史上の知識と与えられる。土着原住民が海辺の白水郎として、海人族の流れをくむことは容易にうなずけるし、絶友の乱に活躍した佐伯是本の支配下にあったものと思われ。しかし天慶(九四〇)の頃の人口を、後世の落人の年代から逆算しても、大した数にならないと思われ。各浦に落人の流着・定着するのは、主に元龜・天正の戦国時代である。そして、この絶友の乱以後平穏な豊後水道に日本史上の動きをみるのは、平家落人の伝説である。下浦を廻ってこの伝説に興味をもつていたが、佐伯湾内の大入島に残る荒網代屋など、定着した伝説は聞かれない。勿論地域的に豊後水道と流れ落ちのびた平氏がいても不思議ではないが、源氏のしつような探索を考えると、子孫の生存までは困難であったのかも知れない。